
幻想郷のとある日常【東方】

みちる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷のとある日常【東方】

【Nコード】

N2284N

【作者名】

みちる

【あらすじ】

ここは幻想郷

異変など何も起きません

あ、たまには起きるかも

はじめに（後書き）

何書こうかしらね。さっぱり決まらない

2週間はかけなそうだからアンケートということでおk

神奈子と諏訪子と早苗の場合（前書き）

というわけで一つめ投稿です。

中身はタイトル道理ですなゝ

神奈子と諏訪子と早苗の場合

「諏訪子様、神奈子様、朝ですよー」

うー、早苗が呼んでる．．．起きなきゃ

「ふあゝ。おやよう早苗、神奈子」

「かつぜちゅ回ってないぞ、諏訪子」

神奈子も回ってないよ。そう言いたかった

「二人共ですよ、朝ごはんはできてますから顔を洗ってきてくださいな」

そう言われると味噌汁とご飯のいい匂いがしてきた
お腹も空いていたので顔を洗い食卓に着こう

「今日は焼き魚に大根おろしか、良いじゃないか」

「納豆は．．．？」

「明日は納豆にしますよ。諏訪子様」

別に大根おろしも嫌いではない。だけど納豆には勝てないと思う

――――

みんな食べ終わった

「「「ご馳走様でした」」」

食べ終わった後

「ねむ．．．」

神奈子はまた寝るみたい。だから太るのだ

「早苗ー何かしょー」

「洗濯物と食器洗い終わったらですよ」

しょうがないので渋々手伝う。神奈子働け

――――

「諏訪子様、ありがとうございます」

「いや、良いって」

働くとなかなか気持ちが良いものだ

天気も良いし、縁側にでも座ってくつろぐ

早苗は隣でお茶を飲みながら煎餅を食べている

私も眠くなってきた

「早苗、膝枕してー」

「はいはい、どうぞ」

パタン

そのまま寝ようとしてしたとき

「こうして見れば本当に子供みたいなんだけどなー．．．」

ちょっと聞き捨てならないことを聞いたがこの膝枕に免じて許してあげよう

そんなことを考えていたらいつのまにか寝てしまった

――――

「諏訪子、早苗、昼ごはんは？」

「すうー」

「……もう夕方だよ、神奈子」

早苗はまだ寝ているらしく、返事がなかった

「……疲れてるんだな、早苗も」

「うん、もうちょっと寝かせてあげよう」

――――

「あっ夕飯作らなきゃ！」

早苗が跳ね起き、随分と面白い動きをしてくれた

「早苗、夕飯なら私たちが作ったよ」

「そうそう、うまく出来たんだから食べてよね」

実は3回ほど失敗し、残骸が台所に捨ててあるのは内緒

「ありがとうございます、諏訪子様、神奈子様」

それにしても神奈子の不器用さには驚いた

卵がうまく割れないからといって柱で割るのはどうかと思う

「じゃあ食べようか」

「うん、冷めないうちにね」

「「「いただきまーす」」」

パク

・・・すごい味

なんというか今まで食べたことの無い味

早苗は美味しい美味しいといって食べてくれた。嘘だと思っけど嬉しい

神奈子はどうでも良いや

――――

「美味しかったですよ、二人の手料理」

「ありがとう、早苗」

「お世辞でもうれしいよ」

「お世辞じゃありませんよ」

神奈子はお風呂に入り、私と早苗は皿を洗っている。神奈子働け

そしてお風呂に入った後、疲れたのですぐに眠ることにした

――――翌日

「諏訪子様、神奈子様、朝ですよー」

いつもどおりに一日が始まる

「早苗ー今日のおかずはー？」

「魚と納豆ですよ」

神奈子と諏訪子と早苗の場合（後書き）

という感じでしたー

感想あるとう p 主張り切ります

魔理沙とアリスの場合（前書き）

こんかいは日常っていうより時系列めっちゃ長いっす

魔理沙とアリスの場合

「アリス、今日も来たぜ」

「いらっしやい、今日はどんな紅茶が良い？」

霧雨魔理沙は最近ほぼ毎日私の家に来る

「今日はストレートでもらおうかな」

「たまにはあなたも紅茶の葉を持ってきなさいよ」

「はは、考えておくれ」

只単にお茶を飲み本を読みに来る毎日
そんな毎日ではなく違う毎日を求めた

（「ねえ魔理沙、あなた毎日来るならいっそ私の家に住まない？」

「じゃあそうさせてもらおうかな」なんてことにならないかしら．．
）

私は勇気を振り絞って言うことにした

「ね、ねえ魔理沙、あなた私の家に住まない？」

「いや、駄目だ」

即答だった

いや、分かっていただけでも．．

なんで？と聞いた

「アリスと私は寿命が違うだろ？」

その言葉に私は頷く

「私も今は若くない、だからこの若い姿を保つにも限界があるのさ」

と彼女は言った、そんなこと私は気にしないのに

――――

あれから相当の年月が経った

「アリス、今日も来たぜ」

「いらっしやい」

彼女がこの家に居る時間は段々と短くなっていく
前は殆ど一日中居たのに

「今日はジャムを持ってきたぜ、紅茶に頼む」

「あら、気がきくのね。ありがとう」

私はカップに紅茶を注ぎながら言った

「ねえ魔理沙、今日は泊まっていけない？無理なら良いけど」
「ああ良いぜ。」

私は嬉しくて

夜遅くまで話して紅茶を飲みたかったのに眠ってしまった

そして朝になり私はとなりに居るはずの人を求めた

「・・魔理沙？」

返事はない

だがテーブルの上に書置きを見つける

『私のこの姿を見られるわけに行かないからな、先に帰らせてもらうぜ』

私はその手紙を読みながら考えたくもないことを考えてしまう

魔理沙はあとどのくらい生きていられるのだろうか

魔理沙はいつまで私の家に来られるのだろうか

そんなことを考えていたら涙が出てきてしまった

――――

それからまた数十年経った

「魔理沙今日来るの遅いな・・・」

もう夜の6時を回っている

外から箒の音が聞こえてきた

ガチャ

ドアノブが回る音がして魔理沙が入ってきた

そしていつもどおり紅茶を出し、本を読む

私は何も言わない。いや言えなかった
なんとなく分かるのだ。彼女の寿命が近いのを

そんな沈黙を破ったのは魔理沙だった

「アリス、私は明日からはこない。賢いお前のことだから何でだなんて聞かないだろ？」

とうとう恐るべき時が来てしまったらしい

「あなたのことだから地獄に行きそうね」

私は涙を流しながら言った

「そうかもな、でも地獄から動物にでもなんにでもなって帰ってきてやる・・・またな」

確かに彼女はそう言った

そして私はこう返す

「うん、またね」

――――

魔理沙が来なくなってから私は三日三晩泣き通した
そして出る涙も無くなり、私は元の生活に戻った

ある日外で水撒きをしていると黒猫が擦り寄ってきた

「あら、何か食べる？」

そんな毎日が一ヶ月ほど続いた

今日も猫は来る

「実はあなたが魔理沙なんじゃないかしらね、どう？」

猫はニャーと答えた

「バカ、そんな訳ないだろ？」

どこからか声が聞こえてきた。

その声を聞いた瞬間涙が出てくる

「私はここに居るんだからその猫は私なわけがない」

ああ、いつもの魔理沙だ

「ただいま」

「おかえりなさい」

魔理沙とアリスの場合（後書き）

というわけで、まりありでしたー

最後魔理沙はもどってきましたがね。若くなってます
また同じような日々をすごすんでしょーうね

博麗神社の場合（前書き）

これ自分で見て何が面白いんだろうかって思ってしまった文のひとつ

まあ・・・一応うpするけど

博麗神社の場合

幻想郷には博麗神社というとても貧乏な神社があったとき
そこに悲痛な声が響く．．．

「賽銭が．．．無いっ！」

博麗霊夢は困っていた

そう、神社の為に必要な賽銭がはいっていないのだ

「霊夢ーどうかしたかー？」

「あ、萃香。これからはお酒飲めないわよ」

萃香とはなんでか博麗神社に居る鬼である

「え．．．どゆこと？」

「賽銭が入ってないからお酒買うお金が無いのよ」

「なんで？」

「それが分かったら苦労はないのよっ！」

「だよねー」

ということで二人で考えてみた

「私はちゃんと仕事をしているのに．．．なんでかしらね」

「仕事（異変解決）しかしてないからじゃない？例えば村の人達と
交流とかもしてないしね、妖怪はよく会うけど」

「めんどくさい」

「．．．だからダメなんですよ」

霊夢は目からウロコと言う風に

「それは考えなかったわ・・・」

「で、交流する？」

「めんどいから貧乏でも良いわ」

「おゝさゝけゝはゝ!？」

霊夢はさもなげやりに

「じゃあ自分で稼いできなさいよー」

と言った

萃香はうーと唸り

その後どこかへ行ってしまった

そして上からひとつ声が聞こえてきた

「あらら、本当に行っちゃったのね」

「あら、紫。どうかした？」

「いえ、相変わらず貧乏ねーって思って」

「余計なお世話よ。で何の用？」

「からかいに來ただけよゝ」

そしてまたスキマへ帰っていく紫であった

「・・・何しに來たんだか」

一一一一一一

さてその頃萃香はと言うと

巫女服に祈祷棒の巫女スタイルであった

「賽銭が集まらないのは巫女が悪いんだもんね。私が巫女になれば良し！」

という訳らしい

「きっと私のほうが巫女の仕事をやれる！」

そう叫び萃香は人里へ降りていった

――――

一週間後

「・・・なんか最近霊夢の奴妙に機嫌が良いな。いつも煎餅なのに今日は饅頭出してくれるそうだ」

「だね」

「てか何でお前巫女服着てるんだ。」

「そりゃ私が巫女だからだよ、ちゃんと人里に行って交流もしてるのさ」

「そうなのか、そんなことより最近の霊夢は一種の異変だな」

「そういえば私は異変解決もしなきゃだったね」

と言い、萃香は台所へ駆けていった

「・・・私も付いていくか」

台所に霊夢は居た

「霊夢！このお菓子たちのお金はどこから出てきたの！」

「え、賽銭箱からだけど・・・」

「うちの賽銭箱に賽銭が入る訳無いでしょう！これは一種の異変だよ！」

「まあまあ、とりあえず見てなさいって」

とすると聞こえてきたのは

ガシヨン

お金とお金がぶつかりあう音だ

「あら、萃香ちゃん」

「あ、お婆あちゃんだ。何してるの？」

「萃香ちゃんがここで巫女やってるっていうからお賽銭入れに来たのよ」

霊夢はほらね。という風に腕を組んでいる

「最近萃香が人里に行ってみんなと話してるからじゃないかしら」

「異変の原因は私だったか・・・」

「まあ、いい事じゃないか？賽銭は入るようになったんだし」

「そうだね、お酒も飲めるしね」

そして萃香と霊夢はお賽銭が入るようになったので裕福に暮らすことが出来ましたとさ

「なんだこの終わり」

「筆者がめんどくさくなったらしいわ」

「こんな終わりでごめんねー」

博麗神社の場合（後書き）

絶対面白くないって！この文！

こんな文に良い感想くれるとう p 主沈みます
どっちかというと酷評のほうが嬉しい文 D A ☆ Z E

博麗神社の場合（2）（前書き）

前作の続きです、続いてないけど

前半が一昨日書いて後半今日書いたからだいぶテンションが違う・

後半がまじめな感じですなー

この文読んで何か考えてくれると書いた甲斐があります
でも何も考えなくても読んでくれるだけで（ry

博麗神社の場合（2）

「さて、あと7日くらいで祭りね」

霊夢は呟いた

そして萃香登場

「お酒は飲めるのかー!？」

「ええ、ちゃんと準備手伝ってくれたらね」

「何をすれば良いんだ？」

「村の人達に祭りのこと伝えてきてくれるかしら？」

「おっけー、おーさーけー♪」

すごい勢いで駆けていった

ガラガラドーン！

そして石段でずっこけた

「……. どんだけ酒が飲みたいんだか」

――――

そして当日の一日前

「……. 準備忘れてたから手伝って、魔理沙」

「はいはい、ちゃんと準備しておけよな…….」

「まだ大丈夫ーと思ってたらいつのまにか当日前だったのよ」

萃香さんが登場しました

「霊夢っ！手伝うことはあるか!？」

「萃香はこのリストにあるもの買ってきて」

「えーと、お酒に大量の紙。紙は何に使うの？」

「おみくじ用よ」

「りょーかい」

萃香さんが退場しました

「それで私は？」

「魔理沙は人々に伝えてきてくれる？明日祭りだって」

「あいよ」

彼女は箒にまたがりすぐに飛んでいった

そしてひとり霊夢は微笑

「しめた・・・私のすること無くなったわ」

と言ったのだった

――――

そして翌日

「魔理沙は出店だすの？」

「いや、私の商品は人間向けのは扱ってないから遠慮するぜ」

「あらそう」

「今回は私も楽しむ側だ」

そうこうしていると下駄が石を叩く音が聞こえてくる

「霊夢く買ってきたぞ」

「おかえり、萃香」

「それで私はこのお酒飲んでは良いのか？」

「そんな訳ないでしょー、来てくれた人達に配るんだから」

そして祭りの準備も終わり、次第に人々が来たのだった

萃香はお酒を呑めないと知って不満そうだ

「ぶー」

「みんなにお酒配ったあまりをあげるわよ。残りそうだし」

その一言で萃香の機嫌はなおったようだ

今度は祭りに行きたそうにソワソワしている

それを見ていた魔理沙が

「それじゃ、私達は遊んでくるか。萃香、行くぞ」

「いいねー！」

「はいはい、行ってらっしゃい」

二人は走って遊びに行ってしまった
そうすると

「何だか楽しそうね」

横から紫が出てきた

「ほんとよ」

「幻想郷はいいところよ、祭りひとつ取っても外の世界なんかより」
「そんなこと知らないわよ」

紫が真面目な顔で語り始める

「外の世界はもう何にも守られていないわ、自然にすらね。」

「そう、それで？」

「ここもそのうちそうなるかもしれない」

そしてニヤリと笑ってこう言った

「この幻想郷は守る価値があると思う？ 霊夢」

「さあ、知らないわよ。そんなこと」

そう言ったあとにひとつ付け足した

「でもね、大事なものがあるから、守らなきゃだめなのよ」

「・・・そうね。あなたらしい意見だわ」

「褒め言葉として受け取っておくわ」

そう言った後

一気に場の空気が緩み、外の喧騒がまた聞こえてくる

「紫、お酒でも呑む？」

「あの鬼ががぶ呑みするようなお酒じゃないわよね」

「ええ、あのウワバミには勿体無いお酒よ」

「それじゃ、頂くわ」

二人の酒呑みは静かに呑んでいる

その静けさの外では祭りの騒ぎが聞こえていた

「魔理沙、あの的倒れないよー」

「どれ、その銃私に貸してみな。ここにこうして改造を．．うわっ！」

「景品と一緒におっちゃんも倒れちゃったよ、ははは！」

この騒がしさは博麗の巫女が居る限りは止まないだろう

そして幻想郷の時は平和に過ぎていくのだった。そう、いつまでも．．

博麗神社の場合（2）（後書き）

最後の方ちょいと分かりにくくしてみました（・ω・）シャキーン

でも分かるんじゃないでしょうか。
いつまでも平和でありますように。と思ってね

魔理沙とアリスの場合（改訂）（前書き）

書き直したやつです。

ちよっとは分かりやすいかなーって思う

魔理沙とアリスの場合（改訂）

「アリス、今日も来たぜ」

「いらっしやい、今日はどんな紅茶が良い？」

霧雨魔理沙は昔からほぼ毎日私の家に来ている

「今日はストレートでもらおうかな」

「たまにはあなたも紅茶の葉を持ってきなさいよ」

「はは、考えておくれ」

只単にお茶を飲み本を読みに来る毎日
そんな毎日ではなく違う毎日を求めた

（「ねえ魔理沙、あなた毎日来るならいっそ私の家に住まない？」

「じゃあそうさせてもらおうかな」なんてことにならないかしら．．

）

私は勇気を振り絞って言うことにした

「ね、ねえ魔理沙、あなた私の家に住まない？」

「いや、駄目だ」

即答だった

いや、分かっていただけでも．．

なんで？と聞いた

「アリスと私は寿命が違うだろ？」

その言葉に私は頷く

「私も今は若くない、だからこの若い姿を保つにも限界があるのさ」

と彼女は言った、そんなこと私は気にしないのに

――――

あれから相当の年月が経った

「アリス、今日も来たぜ」

「いらっしやい」

彼女がこの家に居る時間は段々と短くなっていく
前は殆ど一日中居たのに

「今日はジャムを持ってきたぜ、紅茶に頼む」

「あら、気がきくのね。ありがとう」

私はカップに紅茶を注ぎながら言った

「ねえ魔理沙、今日は泊まっていけない？無理なら良いけど」
「ああ良いぜ。」

私は嬉しくて

夜遅くまで話して紅茶を飲んでいたかったのに眠ってしまった

そして朝になり私はとなりに居るはずの彼女を求めた

「・・・魔理沙？」

返事は無い

だけど私はテーブルの上の書置きを見つける

『私のこの姿を見られるわけに行かないからな、先に帰らせてもらうぜ』

私はその手紙を読みながら考えたくもないことを考えてしまった

魔理沙はあとどのくらい生きていられるのだろうか

魔理沙はいつまで私の家に来られるのだろうか

そんなことを考えていたら涙が出てきて止まらなかった

――――

それからまた数十年経った

「魔理沙今日来るの遅いな・・・」

もう夜の8時を回っている

外から箒の音カサカサという音が聞こえてきた

ガチャ

ドアノブが回る音がして魔理沙が入ってきた

そしていつもどおり紅茶を出し、本を読む

私は何も言わない。いや、言えなかった
なんとなく分かるのだ。彼女の寿命が近いのを

その沈黙を破ったのは魔理沙だった

「アリス、私は明日からはこない。賢いお前のことだから何でだなんて聞かないだろ？」

とうとう来るべきあの時が来てしまったらしい

「あなたのことだから地獄に行きそうね」

私は微笑ながら言った

「そうかもな、でも地獄から動物にでもなんにでもなって帰ってきてやる……またな」

確かに彼女はそう言った

そして私はこう返す

「うん、またね」

――――

魔理沙がそういつて家を出てから私は三日三晩泣き通した
そして出る涙も無くなり、私の生活は元に戻り始めた
でも―――家の紅茶は減らない

「それはそうよね、殆ど魔理沙が飲んでいたようなものだもの」

誰が聞いている訳でもない独り言を呟やき、淹れ方を忘れかけていた紅茶を久しぶりに淹れることにした

それを庭で飲んでいると

「シャンハイ」

「どうかした？上海。あら・・・」

足元に黒猫が居た

「どうかしたの？黒猫さん」

黒猫は何も言わずに紅茶を見ていた

「あら、何か食べる？」

その猫がなんとなく頷いたような気がする

――――

そんな毎日が一ヶ月ほど続いた

今日も猫は来ている

「実はあなたが魔理沙なんじゃないかしらね、どう？」

猫はニャーと答え、今度は別の方向から声が聞こえた

「バカ、そんな訳ないだろ？」

どこからか声が聞こえてきた。

その声を聞いた瞬間涙が出てくる

「私はここに居るんだからその猫は私なわけがない」

ああ、いつもの魔理沙だ

「ただいま」

「おかえりなさい」

ひとつ区切りを付けて

しばらく更新できずに居ました。

じゃあこれから更新できるのか？と聞かれるとそうでも無いです

しかし書く時間はそこそこあります。

ネタも充分とはいえないけどあります

じゃあ何で書かないんだ・・・と言われると

自分の書く小説がどうしても暗い内容になってしまうのです・・・

例えコメディーを書こうとしても途中でシリアスダークな展開になり恋愛ものを書こうとしてもどうしても「魔理沙とアリスの場合」のようになってしまう

しかしそんな小説載せたところで感想が帰ってくるとは考えにくく読んでる方もげんなりする内容です

だけど・・・自分はほのぼのな日常を書きたいのです！

まあそっちのほうはあんまり思いつかないんですけどね（笑）

でもリクエストがありましたらそれを書きますし。

もしも恋愛のいちやいや系が読みたいと言ってくださればリクエストに応え書き始めます。

ダーク系が読みたいと思う方は居ないでしょうね・・・
あれは自分で書いたあと正気に戻って読むとお腹が痛くなる内容でした（書いてる間は自分の指に動きを任せるため）

なので、スランプ気味な自分に何かリクエストくだされば・・・自
己満足な文ですが書きます
ここまで読んで下さりありがとうございます

ひとつ区切りを付けて（後書き）

なぜ活動報告ではないかというところの小説だけお気に入りしてる人も居るからです

あとマリアリはよく考えてください。

魔理沙は人間で戻ってきた・・・それが現実です

蓬萊人達と半獣の場合（前書き）

いちごみるくさんのリクエストで慧音と妹紅のお話です
自分で読んでて恥ずかしい。

蓬萊人達と半獣の場合

妹紅は今日も服をボロボロにして帰ってきた

「妹紅。少しは縫う私の身にもなってくれ」

上白沢慧音は半ば怒りながら彼女の服を修繕していた

「ほら、出来たぞ。縫えない部分は継ぎ接ぎだ」

「ありがとう、慧音」

「終わったから寝るぞ。明日も早いんだ」

慧音は布団に入りつつ言った

「そうだな…おやすみ」

そして次の日の朝

「それじゃあ行ってくる、慧音」

「妹紅、今日も行くのか？気を付けろよ」

「気を付けなくてもどうせ私は死なないよ」

と言い妹紅はひらひらと手を振って外に出ていった

藤原妹紅——彼女是不老不死、今は蓬萊人。元人間だった
彼女は今上白沢慧音の家で生活している

「体は良いが破れた服を縫うのは私なんだがな…」

妹紅が去った後慧音は一人ごちていた

――――

妹紅はいつもどおり竹林へやってきていた

そこには二人の女性が居る

「輝夜、今日こそお前を殺してやる！」

「あら。たかが人間にそんなこと出来るかしらね」

「つべこべ言わずにやるぞ！」

そういうと妹紅は黒髪の少女の元へ飛んでいった

蓬莱山輝夜、八意永琳。彼女達もやはり蓬莱人。不老不死だった
その中の二人は昔から顔を合わせれば殺し合いをしている

なぜそんな不毛な争いをしているか――それは二人にしか分からない

「ほら、どうしたの？今日は動きが鈍いわね」

「うるさい、今日はちょっと調子がわるいんだ！」

そういうと妹紅はスペカを取り出した

「不死『火の鳥　一鳳凰天昇一』」

そのスペカに輝夜も答える

「もういい加減見飽きたわそれは。　神宝『ブリリアントドラゴン』」

妹紅のスペカは避けられ輝夜のスペカが妹紅に襲いかかる
しかし妹紅は笑っていた

「――『今日こそ殺す』って言ったろ？」

妹紅は更にスペカを掻い潜り『直接』殴りに行った

「今日は私の勝ちだな！輝夜」

「はあ：甘いわね 難題『仏の御石の鉢 一碎けぬ意思』」

だが輝夜は微動だになかった

輝夜は突如もう一枚スペカを取り出すと発動をさせる
それは妹紅の頭にぶつかり鮮血と肉が飛び散った

「今日も私の勝ちね。永琳、帰りましょ」

「はい、姫様」

頭をかち割られ地に臥せる妹紅は動くことも言葉を返すこともでき
なかった

――――

そして夜。

「妹紅今日は遅いなあ……」

いつもは夕方には毎回ボロボロの姿で帰ってくる
だがこんなに帰りが夜遅くなることはなかったのだ

その時外でドサツと音がし、慧音を動かした

「…妹紅か？」

慧音が戸を開けるとそこには八意永琳と倒れた妹紅の姿があった
妹紅の白い髪は出血により深紅に染まっている

「確かに届けたわよ、あなたのお姫様」

そういうと永琳は竹林の方へと飛んでいった

慧音はすぐに妹紅の方へ駆け寄り彼女を抱き起こした

「妹紅！大丈夫か！？」

もぞもぞと動く辺りまだ大丈夫そうだ

「あー慧音？体は大丈夫だけど…また服ボロボロにしちゃった」

よく見ると服の白い部分は赤く染まり所々に大穴が空いていた

「妹紅…またか」

慧音はにつこり微笑むと…妹紅に頭突きを繰り返した

「むべっ！」

その頭突きの音は二軒先まで聞こえたそうだ

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

「妹紅。起きろ」

そのまま気絶をしていた妹紅は慧音に揺り起こされた

「風呂に入って血を流さなきゃな」

「はいはい」

そして風呂場で血などを落としさっぱりとした妹紅の髪を慧音は梳かしていた

「妹紅の髪は綺麗だな、たまにはいじってみないか？」

「嫌だ」

その長く白い髪には常に火符が結ばれている

只の人間であった妹紅はそれらがないと何も出来ないのだ

「あと髪が大分長いが切らないのか？これの長さはおかしいぞ」

「…この髪は誓いだよ」

そのまま妹紅は言葉を続けた

「あの時誓ったんだ。目的を達成するまで髪は切らないってね」

妹紅は真面目な顔つきで答えていた

「そうか、なら良いんだ……」

しばしの沈黙が流れた

「終わったぞ、妹紅」

「ん、ありがと。じゃあ寝ようか」

だが布団に入ろうとした妹紅を慧音が止めた

「なあ……人間に戻りたいとは思わないのか？」

妹紅は少しのあいだ考えていた

「昔はちよつと思つたさ。家を没落させ、自分をこんな体にした輝夜を憎んで憎んで憎みきつた」

更に言葉が続ける

「でもな、ずっと生きてたからなんでこんな事になったのかも考えられたし輝夜のことも少しは分かった……でも何よりも慧音に会えたからな。今は後悔してないよ

妹紅は照れくさそうに笑いながら話していた

「さて、もう寝よう慧音。もう遅い」

そう言うときすぐ布団に潜り込み寝てしまった妹紅に聞こえぬように慧音は呟いた

「いつか只の女の子に戻れると良いな」

蓬萊人達と半獣の場合（後書き）

なんだろうかな。

いつか妹紅は髪 of 長くない只の女の子に戻れるのでしょいかね
只その目的はなんだろうか。それはご想像にお任せします

そして長い

博麗神社の場合（3）（前書き）

前に書いてある博麗神社の場合（2）の別Verです

というわけで前半は一緒。中盤から別物になりますぜ。
何も考えずに読むのが良いかと思われます

博麗神社の場合（3）

ここは博麗神社、今ここに居るのは巫女の博麗霊夢と鬼の萃香である
いくら人が居ないとは言えここは神社

「さて、あとちょっとで祭りね」

祭りくらいはあるのである

「お酒は飲めるのかー!？」

「ええ、ちゃんと準備手伝ってくれたらね。これ人里に貼ってきてくれる？」

「おっけー、おーさーけー♪」

そのまま萃香はすごい勢いで駆けていった

そして悲鳴が聞こえると鈍い音が下で響いた、どうやら階段でずっと
こけたらしい

「…どんだけ酒が飲みたいんだか」

――――

そして当日の一日前

「あはは…準備忘れてたから手伝って、魔理沙」

「はいはい、ちゃんと準備しておけよな…」

霊夢の性格はなんとなく分かっている魔理沙は特に動揺もせずに対応した

「まだ大丈夫ーと思ってたらいつのまにか当日前だったのよ」

萃香さんが登場しました

「霊夢っ！手伝うことはあるか！？」

「萃香はこのリストにあるもの買ってきて、紙とお酒。紙はおみくじに使う奴よ」

「りょーかい」

萃香さんが退場しました

「それで私は？」

「魔理沙は人里以外に伝えてきてくれる？明日祭りだって」

「あいよ」

彼女は箒にまたがりすぐに飛んでいき一人残された霊夢は微笑んでいた

「あ…私のすること無くなったわ」

普通の人には出来ないことを平然とやってのける霊夢さん。そこに痺れる（略）

一一一一一一

そして翌日

「魔理沙は出店だすの？出張、霧雨魔法店！みたいなの」

「いや、私の商品は普通の人間向けのは扱ってないから遠慮するぜ」
「あらそう」

「今回は私も楽しむ側だ」

そうこうしていると下駄が石段を叩く音が聞こえてきた

「あら、おかえり萃香」

「霊夢く買ってきたぞ。それで私はこのお酒飲んできれば良いのか？」

「そんな訳ないでしょー、来てくれた人達に配るんだから」

そして祭りの準備も終わり、次第に人々が来たのだった。

「こうして見てみると…人外な連中多いわね」

着々と人は集まっている…だがそれと同じくらい妖怪など明らかに人では無いものも大量に居た

吸血鬼、妖精、半霊半人、幽霊。何でもござれだ
しかし何よりも多い物、それは妖怪の山の者達だ

「守谷神社に行ったら早苗に『それではお邪魔しますね』と言われたんだが…まさかこうなるとはな」

「えーとあれかしらね、おん…ば…しら…!？」

異様に人が賑わっている屋台。そこにあったもの、それは御柱と鉄の輪による3倍ほどでかい屋台（当社比）による輪投げの出店であった

「景品は様々です。天狗が隠し撮った霊夢さんや魔理沙さんのあられもない写真とか色々あります」

「夢想封印!」「ファイナルスパーク!」

的確に”早苗”だけが撃ちぬかれ他の人達は無傷である
黒焦げの早苗が文句を言った

「あいたた、なんですか霊夢さん。私はちゃんとした商売をしていますよ！」

「景品が悪いのよ！ってあんたタフね！」

これが奇跡の力です！と胸を張って答えた早苗。その時ギャラリーが一気に沸いた

早苗の服が焦げ落ち上半身が露になったのだ。そこにあったもの――そう、それは二人には無いもの

それを見た魔理沙と霊夢はつい崩れ落ちてしまった

「私にも奇跡の力があれば……」 「これが格サイズの差って奴なのかつ！」

しかし当の本人達は大騒ぎである

「私たちの早苗の裸は見せないぞ！神様ディフェンス！」

そう言いながら不思議な動きをして神社を後にする3人であった

「次は客で来ますよー！」

「もう一嵐来そうな予感がするわね……」 「はは……私は萃香と色んな屋台に行ってくるかな」

そう言いそそくさと魔理沙は萃香を探しに行ってしまった

霊夢が辺りを見渡すと人間が店をやっている中普通では無い者がやっている屋台も複数あった

咲夜の大道芸、アリスの人形劇、ミスティアの八目鰻売り、永遠亭の薬売り、雲山と一輪のわた…あめ屋…

「原料は何かしら…まさかね」

その屋台を見るといつもの服装では無く浴衣のスカーレット姉妹が居た。その手にはわたあめ

「あーレミリア、”それ”大丈夫なの？」

「何が？普通のわたあめよ」「お姉さま、早く行きましょー、あっちに面白そうなのあるのよ！」

「霊夢、あとで私と回りましょーうね」

彼女は微笑みそう言うとなわたあめ片手に連れ去られてしまった

「大丈夫なら私も食べようかしら、一つちょうだい。一輪」

「はいどうぞ、お代は結構ですよ」

霊夢は感謝の言葉を告げわたあめを受け取った。しかしその時霊夢は見てしまう、まるで毛を刈られた羊の様な雲山の姿を

「!?!…まさかつ」

「いえ、違いますから。大丈夫です。大丈夫と言ったら大丈夫です」

「そ、そそうよね」

そのわたあめは甘さの中にも人生のほろ苦さが入っていた。気がするてか雲山動いてないんですけど

「さて…これからは祭りのメインの時間ね」

ドンッ！

そう霊夢が言うとき空に花火があがった

「そうそう、いいタイミング…にはちよつと早い」

しかしその後もドンドンッ！と縦続けにその音が響く

霊夢が疑問に思い視線を上にあげるとそこには二人の鬼が居た

「霊夢は私と回るのよ！」「いや、私だね！」

その下にぽつんと立っている魔理沙とフラン

「魔理沙ーお姉さまがアレだから私と回りましょ」「ああ、行こうぜ」

そして二人が走り去っていったその後ろから声がした

「霊夢…あなたモテモテで大変そうねえ」

霊夢はその声にすこし驚いたがすぐに平静を取り戻し対応をした

「と言いつつ何で私の手を握ってるのかしら？紫」

「ふふ、あなたと花見酒でも呑もうと思って。あなたと呑むのが一番好きなのよ」

そう言いながら紫は持ってきたらしい盃に酒を入れていた

縁側に座り二人無言で酒を呑んでゆく

そのまま無言で呑んでいると紫が少しばかり近づいてきた

「…なに？紫」

「いえ、ただあなたが可愛いから見ていたいただけよ」

「なっ、何よいきなり！」

そう言いつつ更に紫の顔が霊夢に近づいてくる

その出来事につい霊夢は目をつぶってしまふ

紫の”それ”が達成されようとした時紫の動きが止まりぴくぴく震えている霊夢を見て紫はこう言った

「…残念ね、邪魔が入っちゃったわ」

『霊夢ーどこー？』『お前が邪魔をするからどっか行っちゃったじゃないか！』

遠くから二人の声が聞こえてきた

「紫、別に私は…」

霊夢の隣に居たはずの姿既に居なかった、飲みかけの盃だけを置いて

「ふう…萃香にレミリア、こっちよ」

「「れーいーむーっ！」」

霊夢の姿を見た二人が仲良く駆け寄ってきた
未だにあの件でもめているようだが

「二人とも一緒に回れば良いじゃない。今夜は付き合っ
てあげるわよ」

どんっ！どんっ！

今度こそ本当の花火の音だ

「これが花火って奴なのね、始めて見たわ」

「たまやー！花火見ながらの酒も良いねえ」

その瞬間横から何が来て萃香が吹き飛ばされ、そのまま横の林
まで転がって行った

「私を差し置いて宴会をしようとは良い度胸ですね…宣言通り来
ましたよ！」

そこには東風谷早苗がおみやげらしきキノコの入ったカゴを持っ
て立っていた

「ドヤア」

「おーい、スルメとか色々つまみつけたぞ」

吹き飛ばされた萃香が何事も無かったように色々と持って帰って
きた

「それ私が乾しといったスルメ…」

「宴会の始まりだー！」

「スルメエ…」

――――

そうして長い夜も更け、朝がやってきた

「あいつら何であんなに吞めるのかしら…謎だわ」

いつものように賽銭箱を見て中身を回収する
さすがに祭の後。中身が潤っていた

「あいつらは寝てるから問題は無いわね…」

そう言い霊夢は荷物を持ちどこかへ飛んでいった

――――

「ん、紫様に用事ですか？ 霊夢さん」

霊夢の姿を見た藍が声をかけた

「まあそんな所ね、どこに居る？」

そう霊夢が聞くと藍は紫が居る場所まで案内をした
その部屋に入っても何の気配もしない

「紫、居るの？」

スキマからにゅるんと紫が出てきた

「……昨日はさぞお楽しみだったんでしょうね、おいしいつまみに

お酒と楽しんで…」

そこまで言って紫は気付いた、霊夢から酒の気がしないことに

「…私は静かに呑むのが好きなの、ここなら邪魔は入らないでしょう？」

おつまみと酒を取り出し霊夢は言った

「ほら、昨日の続きしましょう」

「……れいむ」

紫はおもむろに霊夢に近寄り抱き着いた

「近いっ、顔を近づけるな！」

「え、昨日の続きじゃないの？」

そんな会話を聞いていた藍は考えていた

「うん…やはり紫様は霊夢さんと居るのが一番楽しそうだな」

『顔を近づけるな！続きってのはお酒のこと！』

『そんな』

「いやー今日も平和だなあ」

博麗神社の場合（3）（後書き）

というわけでした。

ゆかれい良いよ。ゆかれい

そしてリクエストに応えない俺／（＾Ｏ＾）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2284n/>

幻想郷のとある日常【東方】

2011年10月7日17時50分発行